



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

"Bibel in gerechter Sprache" について (荒井章三先生退任記念号)

著者	荒井 章三
著者別名	Arai Shozo
雑誌名	キリスト教論藻
巻	38
ページ	9-19
発行年	2007-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001609



„Bibel in gerechter Sprache“*について

荒井章三

この新ドイツ語訳『聖書』（外典も含む）の出版は、ドイツの教会内外に大きな波紋を投げ掛けている。発売されて、10日のうちに、初版2000部が売れ切れてしまったという。筆者が手にしたのは、第二版であるが、何らの改訂もないので、これにしたがって、幾つかの問題点について、述べたいと思う。

„gerecht“ という単語は、普通、例えば、“gerechtes Werk” 「きちんとした仕事」のように使われるが、この新訳のポリシーを考慮するならば、「差別のない言語による聖書」とも訳しうるであろう。その点について、まず、「序文」のなかの「この聖書の特徴」を参照しながら、述べておきたい。

「Bibel in gerechter Sprache」という書名は、この翻訳が正しくて、他の翻訳は間違っているということをも主張するものではない。Gerechtigkeit という聖書の根本的なテーマに特別な仕方で対応しようという要請を明らかにするものである。このテーマは、われわれの翻訳の中心において、いろいろな視点で現れる。

あるものにとっては、性差別の言語が問題となる。このような関連では、Gerechte Sprache は、80年代以来ドイツで用いられてきた専門用語、北アメリカで使用された “inclusive language” の翻訳である。ドイツの大多数の人々にとって、ドイツ語とその用法は、この数十年間で変わってしまっている。大学生の場合、“Studentin”（女子学生）と、“Student”（男子学生）は区別されているし、政治家は、女性有権者（Wählerinnen）を見過ごしにすることはできない。教会言語も変化した。女性執事（Diakonin）から

女性主教 (Bischöfin) に至るまで、女性の職制を表す言葉は一般的となっている。たしかに、聖書は父性的世界に由来し、文法的にも、〈イスラエルの息子たち〉 (Söhne Israels) とか〈弟子たち〉 (Jünger) とか男性形で語ることが多い。しかし、純粹に言語学的に正確な翻訳が、それは実際に他の翻訳に見られるのだが、現実には即した、正しい翻訳なのだろうか。人々は、当時、何を理解したのだろうか。そして、その当時に意味されていたことを、現在のわれわれは、どのように捉えるべきなのだろうか。もちろん、『アロンの息子たちのなかのすべての男性』 (レビ記 6・11) のような特別な場合には、通常の使い方は除外されるべきであろう。[筆者注：この新訳の当該箇所では、“Alle Männlichen unter den Nachkommen Aarons” 「アロンの子孫のなかのすべての男子たち」と訳している]。社会史的な根底の上で、それぞれの場合に、男性的な表象が、女性をも含むのかどうか、そして、該当する実態を現在の言葉で、どのように表すのかを、問うことが必要である。

さらに、この翻訳の中心的な特徴は、神を、文法的に男性的な言葉で、一面的に表さない点にある。唯一の神に対するイスラエルの信仰—『聞け、イスラエルよ。アドナイはわれわれの神であり、アドナイのみが唯一の神である』 (申命 6・4)—は、この神が男性的でもなく、この神が女性的でもなかったことを意味したに違いない。神は、文法的に圧倒的に男性として述べられるが、神が性的な二極性を超越しているという、明確な表象は多く存在する。それは、創世記 1・26—28 から始まり、申命記 4・16 とホセア 11・9 で頂点に達する。聖書の読者は、たいてい、神が男性ではないことを、基本的に、かつ抽象的に知っているが、同時に内的かつ外的形姿では、男性として表象することに、慣れてしまっている。そのことによって、(神) 像禁止がないがしろにされる。そして、感情的かつ思想的に神に向かうことに対して、限定的、不確かな限界が定められる。『心と意思をもって、霊と力をもって、アドナイ、神を愛しなさい』 (申命記 6・5)。

第二に、Gerechtigkeit を取り扱うのは、キリスト教とユダヤ教との対話

を顧慮しているからである。とりわけ、新約聖書の場合、ユダヤ的な地盤で成立したこの書物が、いかに反ユダヤ的に、したがって歪曲されて読まれ、翻訳されたかということが、この数十年で、広い範囲にわたって、明らかにされたのである。一例として、山上の説教のいわゆる〈反命題〉を挙げることができよう。そこでは『わたしは、お前たちに言う』という翻訳が、ユダヤ的伝統に対するイエスの言い方として理解されねばならないと考えられてきた。しかし、これはラビたちによって、しばしば用いられた様式であって、より事柄に即して訳せば『わたしは、今日、お前たちに、このように解釈する』ということであって、なんら、〈反命題〉とは関わりがないのである。今挙げた二つの基準は、聖書の神名を〈主〉と訳する伝統に別れを告げる重要な根拠である。

第三に、この書は、社会的 *Gerechtigkeit* と関わる。社会的対決—聖書はそこから成立してきたのだが—の多くは、誤訳されている。例えば、不正行為、暴力行為を行い、そのために罰せられる人を意味するヘブライ語の *rascha* が、あたかも無神論者か不信仰な人かのように、*Gottlose* と訳されるのは誤りである。あるいは、女奴隷や奴隷の代わりに、*Mägde* や *Knechte* [筆者注：有名な『僕の歌』では、“*der Mensch im Dienst*”と訳されている] という場合も同様である。ルターは、自分の世界において、そのように訳したのであるが、ルターの農民的世界は、われわれの世界とは、あまりにも遠く離れている。多くの単語が、きわめて厳しい現実と関わっている今日にとっては、牧歌的に響くのである。]

「かつては、新鮮で、批判的であったものが、もし、不変のままで保存されるならば、古臭い、無意味な、理解不能なものになってしまう。そして、聖書は、博物館に並べられた物になる恐れがある。このことは、古いものが、新たに語り始めるかどうかと、多く関わっている。『あらゆる時代は、伝承を圧倒しようとしている追従主義 (*Konformismus*) から、伝承を改めて救い出す試みをしなければならない』(W・ベニヤミン)。この翻訳は、そのような試みを意図している。

それぞれ異なる宗派によって、ルター訳とか、チューリッヒ訳とか、合同訳 (Einheitübersetzung) とか、様々なドイツ語訳聖書を用いている。それらは、伝統とか、教会の薦めによって、多かれ少なかれ、慣例的に使用されているが、ときおり改訂されている。この他に、特殊な翻訳、Elberfelder とか、Gute Nachricht とかがある。伝統的な翻訳で用いられている言葉がもはや、すべての国民に届かないことは、明らかである。『差別のない言語による聖書』は、新しい試みとして、現存しているドイツ語訳に並んで登場するが、他の翻訳とは、その個性によってだけでなく、この個性が最初から明らかにされているということによって、異なっている。

唯一の正しい翻訳は存在しない。異なったものを理解しようとする場合、前提とか、展望が重要な役割をする。この翻訳は、この数十年の運動との関わりの中で起こった神学的思考の変化に負うところが大きい。その変化は、解放の神学、フェミニズム神学、キリスト教＝ユダヤ教間の対話に根をもっている。それらが、この翻訳プロジェクトに刺激を与えたのである。これらの運動のそれぞれにおいて、聖書が新たに発見され、現代に対する新しい見方と新しい力とを獲得したのである。なぜなら、それらにおいて、いろいろな局面が一つになったのであり、聖書の基本テーマのそれが、再び獲得されたのである。神にとって、つねに重要なのは自由と解放である。真実か真実でないか、あるいは、正しいか間違っているか、このようなカテゴリーは、この二つを視座とする。そして、聖書的伝承の解放する力が新たに発見され、新たに力を働かせるところでは、その中央に、Gerechtigkeit への問いがあるのである。『正しい道の上には命がある』[筆者注：「この道を踏む人に死はない」新共同訳 (箴言12・28)]」。

日本語と異なって、ドイツ語の名詞には、それぞれ「性」がついている。例えば、der Vater (父)、die Mutter (母) のように、生物的な性別と一致する場合が多いが、der Löffel (スプーン、男性名詞)、die Gabel (フォーク、女性名詞) das Messer (ナイフ、中性名詞) のように、無生物でも男性・女性・中性の区別があるから、やっかいである。しかし、この新訳で問題とし

ているのは、職業・身分を表す名詞の場合である。「大学生」を表す場合、男子の大学生の場合は、(der) Student、女子の大学生の場合は、(die) Studentin、教師の場合、Lehrer (男性教師)、Lehrerin (女性教師) という風に、男性名詞の後ろに in をつけて、性別を区別している。日本でも、昔は「大学生」といえば男子だけだったから、後に大学に女性が入学するようになると、「女子学生」という言葉が使われるようになった。ドイツにおいても、そうであった。時代の流れによって言葉が変化するのは当然だが、「読者」を表すのに、Leser と Leserin の二つを表記しなければならないとなると、面倒になってくる。昔は、本や新聞を読むのは、男子が主であったから、Leser のみで済まされていたのであろう。この *Bibel in gerechter Sprache* でも、序文には、日本語であれば、ただ単に「読者 (の皆さん)」で済むのであるが、たびたび *Leserinnen und Leser* という言葉が出てくる。

このことは、聖書本文にも反映している。例えば、従来の聖書では、イエスに従う弟子たちは、マグダラのマリアなど特別な人々を除いて、すべて男性であったと考えられ、ギリシア語本文もそうだが、ドイツ語では、*Jünger* と訳されてきた。日本語の場合も、「十二弟子」はもちろんだが、他の弟子たちも男性という了解のようなものがあつたと思う。しかし、実際には、女性がそのなかになかったと考えるのは不自然であるから、この聖書では、当然 *Jüngerinnen und Jünger* と訳されており、*Nachfolgerinnen und Nachfolger* と訳している箇所もある (マルコ 4・10)。逆に考えれば、このように女性形が併記されることによって、われわれが、聖書を男性中心に読んできたということを、われわれに思い起こさせるのである。ルカによる福音書 2 章 1—20 節はクリスマス・イブの礼拝で必ず読まれるが、8 節から 14 節までを引用する。

In jener Gegend gab es auch Hirten und Hirtinnen, die draußen lebten und über ihre Herde in der Nacht wachten. Da trat ein Engel der Lebendigen zu ihnen und der Lebendigen umhüllte sie. Sie aber fürchteten sich sehr. Der Engel sprach zu ihnen: "Fürchtet euch nicht! Denn seht, ich verkünde euch große Freude, die das

ganze Volk betreffen wird : Heute ist euch der Gesalbte der Lebendigen, der Rette, geboren worden, hier in der Stadt Davids. Und dies sei das Erkennungszeichen für euch : Ihr werdet ein Neugeborenes finden, in Windeln gewickelt, in einer Futterkrippe. “Plötzlich erschien zusammen mit dem Engel eine große Schar des himmlischen Chores. Sie priesen Gott mit den Worten :

„*Glanz in den Höhen bei Gott!*

Und Friede auf der Erde bei den Menschen,

die Gott wohlgefallen ! „

次に、比較検討のために〈ルター訳〉（8節—14節）を併記する。

Und es waren *Hirten* in derselben Gegend auf dem Felde bei den Hürden, die hüteten des Nachts ihre Herde. Und siehe, des Herrn Engel trat zu ihnen, und die Klarheit des Herrn leuchtete um sie ; und sie fürchteten sich sehr. Und der Engel sprach zu ihnen : Fürchtet euch nicht ! Siehe, ich verkündige euch große Freude, die allem Volk widerfahren wird ; denn euch ist heute der Heiland geboren, welcher ist Christus, der Herr, in der Stadt Davids. Und das habt zum Zeichen : Ihr werdet finden das Kind in Windeln gewickelt und in einer Krippe liegen. Und alsbald war da bei dem Engel die Menge der himmlischen *Heerscharen*, die lobten Gott und sprachen ;

Ehre sei Gott in der Höhe,

und Friede auf Erden,

und den Menschen ein Wohlgefallen !

まず、目に付くのが *Hirten und Hirtinnen* 男性の羊飼いと女性の羊飼いである。「羊飼いたち」という日本語には、文法上、男女の区別はないが、私たちは通常、男性の羊飼いを連想する。しかし、それが間違いだというのが、この新訳の主張である。たしかに、現在のベドウィンには、女子が羊を飼うこともあり、女性の羊飼いがその当時、いなかったとは言えないが、「性差」は、この新訳の重要な柱の一つであるから、当然の処置ということになるろう。

しかしながら、ここまで、性差の問題を普遍化して、テキストに読み込むことが必要であるかどうか、疑問である。言語に含まれる「暗黙の了解」とか「連想の豊かさ」を否定してしまう危険性も否定できないからである。

もちろん、このような表現は、ドイツ語の文法的な制約にとどまるものではない。それは、“eine große Schar des himmlischen Chores“ で明らかになる。新共同訳では、ルター訳と同様「天の大軍」と訳されているのであるが、ここでは、「天のコーラスの大群」と訳されている。ギリシア語は、stratias ouraniou であり、この「天の軍勢」という語法は、おそらく旧約の「万軍の主」（ヤハウエ・ツェヴァオート）と関係するであろうから、「コーラス」と読むには無理がある。ルター訳の Heerscharen の単数形 Heerschar は文法的には女性形であるが、意味的には「軍隊」であり、内容的には男性の集団である。現在では、ドイツの場合も、日本の場合も女性の兵隊がいるのであるから、わざわざ「コーラス」に変える必要はないのではなかろうか。「羊飼い」が登場する牧歌的な風景には、「コーラス」のほうが相応しいと考えたのであろうか。これは、あまりにも行き過ぎの誤訳としか言いようがない。この新訳は、たしかに、これのみが「正しい」訳であるとは主張してはいない。しかし、ドイツ・ヘッセン・ナッサウの Evangelische Kirche によって進められたプロジェクトであるから、あの有名なキャロル「いざ、歌え、いざ、祝え」（O du fröhliche）に出てくる “Himmlische Heere jauchzen dir Ehre“ を初め「讚美歌」はどうなるのであろうか。まさか、バッハの有名な「クリスマス・オラトリオ」の歌詞までが改変されるとは思えないが、天使たちの歌声の内容を見ると、全くありえないこととは思えない。

別の例を挙げよう。「主の祈り」（マタイ 6・9 以下、ルカ 11・2 以下）である。マタイの冒頭では、“Du, Gott, bist uns Vater und Mutter im Himmel, dein Name werde geheiligt. Deine gerechte Welt komme…” となっている。それに対し、ルカでは、“Du Gott, dein Name werde geheiligt. Dein gerechtes Reich komme” となっている。この新訳では、原則的に一つの書の翻訳は一人に割り当てられているから（それぞれの書の序文に翻訳者の名前が掲げられている）、マタイとルカは、別の翻訳者が担当している。しかも、委員会訳では

ないので、それぞれの翻訳については、各人が責任をもつことになっている。したがって、そこには神学的な温度差が生じることは、免れ得ない。それにしても、マタイの場合は、強烈な印象を与える。「天におられる父と母である神よ」という語法は、「主の祈り」のみでなく、マタイ福音書全体で用いられている。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」というあのゲッセマネでのイエスの祈り（26・39）でも、「父」だけではなく、“Mein Gott, Vater und Mutter, wenn es möglich ist, soll dieser Becher an mir vorübergehen” 「父と母なる神よ」となっている。

ルカでは、“Gott, wenn du willst, lass diesen Becher an mir vorübergehen！” 「父」を「神」に変えている。因みに、マルコでは、“Gott, Ursprung, von dem ich herkomme, dir ist alles möglich. Lass diesen Kelch an mir vorübergehen.” となっている。

ここで、もう一度、ルカの「羊飼いたち」の物語に戻ろう。そこでは、従来 „Herr“ 「主」と訳されてきたギリシア語の *kyrios* が、“Lebendige” と訳されており、しかも、網掛けになっている。これは、ここだけではなく、この新訳全体にわたって、「神」をいかに翻訳するかという問題と大きく関わっている。旧約では、幾つかのマイナーな神名（例えば、エル・エルヨーン [El Eljon, der höchsten Gottheit、新共同訳は「いと高き神」創15.19他] とか、エル・シャッダイ [El Schaddai, die Gottheit, die nährt und zerstört 新共同訳は「全能の神」創17.1他]）を除いて、ほとんどは、JHWH と Elohim の二つが用いられている。学問的には、前者はイスラエルの神の固有名詞であり、後者は「神」を表す普通名詞だと考えられている。しかし、従来の聖書では、前者を “Herr” 「主」と言い表してきた。この新訳では、“Herr” は、ほとんど用いられない。また、「神」Gott についても、「この翻訳の中心的な特徴は、神を、文法的に男性的な言葉で、一面的に表さない点にある。…神は、文法的に圧倒的に男性として述べられるが、神が性的な二極性を超越しているという、明確な表象は多く存在する。…聖書の読者は、たいてい、神が男性ではないことを、基本的に、かつ抽象的に知っているが、同時に内的かつ

外的形姿では、男性として表象することに、慣れてしまっている」ので、それを排除するために、Gott という男性名詞を避けて様々な読み方を提示している。その点について、〈神の名前は翻訳できない〉という一文が特別に書かれており、そのなかで、「旧約聖書において、4個の子音 j-h-w-h で表される (Tetragramm) 神の固有名詞は、学問的には、Jahwe という風に表されるが、これは、(ヘブライ語にない) 母音を補うことによって得られる一連の間接的な証拠の組み合わせの上に成り立っている。これは、一つの、かなり根拠のある仮説であるということ是可以するが、神の名を真正に、真実に伝えるものではない。たとえば、このような再構成に成功するとしても、神の固有名詞が聖書の時代以来、発音されなかったという事実がもつ重みは大きい。その重要な証拠は、新約聖書である。そこでは、kyrios『主』という言葉が用いられているが、これは、神名を音で表記しているのではもちろんないが、文字で表したものでもない。神名を音で表現するために用いられているヘブライ語の補助的な単語 [アドナイ] のギリシア語による翻訳でしかない。このような、神の名を用いないことの背後には、『神の名を誤って用いてはならない』という十戒の考え方があるであろう。…」そして、次の〈Bibel in gerechter Sprache における神の名前の読み方の提案〉として、ユダヤ教の伝統に従って、Adonaj はもちろん、ha-Schem 「名前」[筆者注：「主の祈り」のなかで「御名が聖とされますように」に「神」の代わりとして表されている]、ha-Makom[場所]、代名詞の Ich, Du, Er, Sie、その他、der Eine, die Eine, die Lebendige, der Lebendige, der Heilige, die Heilige, der Ewige, die Ewige を用いており、JHWH については、Ich-bin-da も用いられている。Gott がそのまま用いられている箇所もある。それぞれの使用は、訳者に任せられているが、各ページの欄外上に、今掲げた名称が併記されているので、網掛けの神名のところを、それぞれの読者が選ぶことができるようになっている。たしかに「神の名を誤って用いてはならない」というユダヤ教の精神に従っていて、ユダヤ教との対話を重視していることは分かるが、「神は男性・女性を超越した存在である」という解釈が果たして、ユダヤ教に通じるのかという疑問は残る。

「神」と言えば、日本では、スサノオのように男性の神を想像することも可能であり、アマテラスのように、女神を想像することも可能である。しかも、「神様」という場合のように男性・女性を超えた存在をイメージすることも可能である。

ところがドイツ語の「神」Gottは、文法的には男性名詞であり、しかも、キリスト教の伝統では、神は一人であって、「女神」の存在は許容できない。たしかに、ドイツ語には「女神」を表すGöttinという単語はあるが、これは、「フライヤ」のように、ゲルマン神話に登場する「女神」に用いられるだけである。

さらに、意味的にも「神」はGottという男性名詞で表され、男性の神として理解されてきたことは否定できない。日本の場合も、仏陀は、釈迦との関係もあって、男性と理解されているが、「観音」は男性・女性を超えた中性的存在とも受け取られている。

「神」の表記については、この新訳に付録としてついている「語彙集」のなかでも詳しく述べられているが、ここでは、これ以上取り上げない。因みに「語彙集」(50ページ以上)はなかなか充実していることを付け加えておきたい。なお、問題の箇所には、全部で797の「注」が付けられていることも述べておきたい。

最後に、この新訳が決定的なものではなくて、一つの可能性の提示であるという点について、創世記の冒頭を掲げておきたい。

Bei Beginn

Als Anfang

Zu Anfang

1 1 Durch den Anfang hat Gott Himmel und Erde geschaffen.

Im Anfang

Zu Beginn

Am Anfang

まるで、メノラーのように美しいが、“Durch den Anfang“という表現を

異常に受け取るのは筆者だけではないだろう。これは、欄外の参照箇所の一つの詩篇33篇6節 “Durch ein Wort des Lebendigen sind die Himmel gemacht“ の影響かもしれないが、Anfang と Wort との違いは大きい。おそらく、次に引用するヨハネによる福音書の冒頭の詩文と深い関わりがあるのかもしれない。

ヨハネによる福音書の冒頭は、通常「初めに言葉があった」というふうに logos は、そのまま「言葉」と訳されているのだが、この新訳では、“Am Anfang war die Weisheit“ となっていて、その欄外には、箴言8章22—31節とシラ書24章9節への言及がある。これらの箇所は、「知恵の賛歌」であり、「主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお、先立って」「この世が始まる前にわたしは造られた。わたしは永遠に存続する」という創造以前の知恵の存在を強調している（「知恵」はもちろん「女性」として表象されていることは、フェミニズムを強調するこの新訳にとって重要な点であろう）。このことが、“Durch den Anfang“ という表現を生み出したのかもしれない。したがって、ヨハネの冒頭の詩文の14節で「言葉は肉体となった」が “Und die Weisheit wurde Materie“ と訳されていても、不思議ではないのかもしれない。しかし、イエスはいったい物質なのであろうか。神とイエスの関係、イエスとわれわれとの関係は、人格的なものではないのであろうか。

『南ドイツ新聞』（2006年12月23日）には、「クリスマスにしか教会に来ない人々が、せっかくクリスマス・イブ礼拝に出席して、もしも、このような聖書の朗読を聴いたならば、もう二度と教会には行かないのではないだろうか」という酷評が記載されている。これが杞憂にすぎないことをドイツ教会のために願うのは、筆者だけではないだろう。

* Herausgegeben von Ulrike Bail, Frank Crüsemann, Marlene Crüsemann, Erhard Domay, Jürgen Ebach, Claudia Janssen, Hanne Köhler, Helga Kuhlmann, Martin Leutzsch und Luise Schottroff, *Güterloher Verlagshaus*, 2006